



満天の星空と楽しめハラスメントと

会員 三宅 恵美子 (73期)

幼少よりずっと、満天の星空の下で過ごしてきた。といっても、僕の生まれは長野県阿智村などではなく、つくらくはないぜの東京砂漠。目を凝らせば辛うじてオリオン座が見える程度。なので、星空というのは、あくまで僕の頭の中の話。以下、お星様野郎の星物語に暫しお付き合いいただければ嬉しく思う。

“つらい悲しい腹立たしい悔しい嫌い”といった負の感情がない。

本当に一切ないのかと自問自答してみた。うーん、確かに、雨の日にミミズを見つけたら「ギャス！」と飛び上がるほど嫌だし、極度の潔癖症なので公衆便所を利用するのは耐え難くつらい。けれど、雨の日は努めて下を見ないようにして歩くと、僕の脳内には「23区きれいトイレマップ」がインストールされているので、そもそも公衆便所には行かない。何より、浮かぶ例はいずれも一過性の負に過ぎず、ならばやはり「一切ない」と断言してよいのではという結論に落ち着いた。

逆に“好き楽しい嬉しい”は日常溢れ狂っている。好きな人が何千人といて好きなものが何千とある。それらきらきら星1つ1つが大切に、この上なく好きで、思い出しては涙が滲む。まさに満天の星空。

それでも稀に「これは、理不尽ってやつではww」と、草は生えつつもモヤあんとし、スチールウールのような汚げな星が一瞬脳の片隅に形成されることもある。そんなときも、無数の星たちの放つ言葉の光や存在それ自体があまりに眩しくて、その汚げな星は陰に隠れ、何なら味わい深くさえ見えてくる。

身体的問題であれば、いくら自分が気を付けていても病気になるときはなる。ナチュラルキラー細胞の部隊だって「力及ばず、かたじけない！」と、目をバッテンにして倒れてしまうこともある。だが、専ら精神の問題なら、汚げな星を憂うも、お星様眩しいなあ和阿呆みたいに喜ぶのも、全ては自分次第。

通勤電車の中、僕のイヤホンからは『蒲田行進曲』が流れる。つついマージングのポーズをしてしまい、その手が横の紳士に当たりそうになって、オット失礼、と頭を掻く。愉快的な1日の幕開けだ。

コイツ何言っちゃってるんだ、世の中そんな甘くない、と愚かしく思われようか。せめてもの説得力補填に、五木寛之氏の言葉を引用させてほしい。近著『迷いながら生きていく』の中で彼は、喫茶店でひとりでお茶を飲む行為一つとっても、退屈だと感じる人、面白かったと感じる人それぞれ。この差は「感情の触覚をいかに動かしたか」にある、と述べている。喫茶店で1人プリンを嗜むとき、まさに僕はその場に崩れ落ちそうに幸せだ。ちなみに、彼の作品で最も好きなのは、同著でも『大河の一滴』でもなく『愛の水中花』。道中気づけば口ずさんでいる。

とはいえ、どうしたってつらいもんはつらい！という価値観の人もいることは承知している。この職に就いた以上、その点は特に留意せねばならない。

いつだったか、友人が僕の思考をこう描写した。「楽しめハラスメントだね笑」と。いやがらせという意味の言葉だけれど、パワやセクと違って、そんなハラスメントなら、たまにお見舞いしても許しておくれ。うざがられつつも、その人の空が少しでもピカッと光ればこれ以上嬉しいことはないし、それによって僕の星空もまた煌々と輝きを増すのだから。



まぼろし博覧会館長のセラちゃん 大切な星の1つ